

「事件から続く家族の苦しみ」

犯罪被害者遺族
小佐々 冽子氏

皆さまこんにちは。

ただ今ご紹介いただきました小佐々冽子と申します。どうぞよろしく願いいたします。

まず、本日いろいろご活躍なさって、表彰の栄誉をお受けになった皆さま、たいへんおめでとうございませす。私自身も、暴力団の事件に絡んでおりますけれども、おそらく皆さま、たいへんなご苦勞をなさっているかと思ひます。

今年山口市組のことなども新聞で読みましたし、やはり皆さま方にこれからもたくさん活躍していただかなければいけないかなと思ひております。これからもどうぞよろしく願いいたします。

それでは私の経験したことをお話しさせていただきます。

事件から14年が過ぎました。平成13年10月31日です。夫は市の職員でした。夕方、職場を退庁したのが6時頃だったそうです。その後、まった

く行方が分からなくなりました。忽然と姿を消してしまつたわけです。私は帰つてこない夫に、一晩中、電話を掛け続けていましたけれども、残念ながら、一度もつながらることはありませんでした。

翌朝、連絡を受けまして、田んぼに行ってみました。自転車や鞆や書類などは散乱しておりましたけれども、夫の姿はどこにもありませんでした。交通事故かと思ひましたが、自転車に傷もありません。道路に血痕なども残っていませんでした。

すぐに警察に連絡いたしましたけれども、警察の皆さんでさえ、一市職員に、命にかかわるような危険な仕事があるのだろうか・・理解していただくには時間を要したような気がいたします。

では、どうして夫が狙われたかと申しますと、事件の約10年くらい前からでしょうか。

市の最高幹部の一人と主犯の業者は親しい間柄だったそうです。夫は、以前にも環境対策部に勤務していたことがあります。環境対策部は下水道とごみの焼却施設の二つの現場を持っています。一度目、夫は環境クリーンセンターというごみ焼却施設の所長でした。

当時から、加害者となる業者はいろいろと問題が多かったそうです。業者と、最高幹部の一人との親しい関係を職員の皆さんはそれなりに知っていたのでしょう。担当職員が、不当なごみ処理をしているその業者を指導すると、業者は親しく付き合っていた最高幹部の一人にすぐ泣きついたそうです。それでよく本庁から一言、「うまくやれ」と電話が入ってきたそうです。その一言だけでほかは一切言わなかったそうです。

職員は、両者が仲の良い状態を分かっていたからあまり逆らえなかったのでしょうか。でも、夫は時々、その最高幹部の一人に、異を唱えていることもあったそうです。そうすると、当時のクリーン

センター所長は、部長職の役職だったのですが、人事異動で職員が5、6人だけの納税課長に異動になりました。

後で聞きましたら、職員の皆さんに驚きが走ったそうです。この人事異動は、後の刑事裁判の判決の中で、職員に対する見せしめの降格人事と断言されています。

夫が納税課長として勤務している間に市長選がありました。そこで現職が敗れ、新市長が当選しました。新市長は市議会議員を5期くらい務めていた方で、議長も経験された方でした。年度途中の10月1日に夫は再び環境対策部に勤務することになりました。

今度は、クリーンセンターの所長ではなくて、部全体を総務的に見る立場でした。その中に廃棄物処理の許認可事務が含まれていました。

結局1年半、環境対策部から離れていたことになるわけですが、その異動の内示を受ける時に新市長は、「あそこ（環境対策部）は大変なことになっている。変えられるのは小佐々しかいないから頼む

よ」とおっしゃったそうです。

そちらにまた赴任してみますと、夫の前任者、この前任者は業者と親しくしていた最高幹部のブレーンで、職員の話によりますと業者の事務所に入り浸りで、飲食も共にしていたそうです。

そんな関係でもあったものですから、よくよく調べてみましたら、違法行為も見逃され、素通りでごみを焼却させる状態だったそうです。結局、便宜を与えていたわけです。

ところが新市長になり、強力な後ろ盾を失いました。業者は慌てたのかもしれない。いろいろな意味でうろたえていたと、刑事裁判で明らかになりました。職員も今までと違って、その業者に対しては、違法、不法なごみはストップをかけるようになったそうです。

そんなことで業者は、便宜を受けることができず危機感を感じたのでしょうか。白昼堂々、夫のいた事務所に、「俺のごみ、今まで大丈夫だったのにどうして止めるんだ」と、怒鳴ってきたことも何度かあるそうです。

当時の助役のお宅まで行って、「職員が厳しくなったのは、あんたがやらせているのか」と、やはり怒鳴り込んだそうです。たまたま助役のお宅が新築中だったので、それに合わせて総桐の箆笥をお祝いとして届けたこともあるそうです。ただ、助役は受け取らずに、そのまま返したということですから、きちんとした対応をなさってくださったと安心した部分もあります。

市議会議長の部屋まで行き、「俺のごみを何とかしてくれ」とも。でも、議長は断ったそうです。

夫ははっきりものを言う性格です。いつもそうでした。曲がったことが大嫌いでした。筋を通します。あまり融通をきかせることもなく物足りなく感じた人もいるでしょう。けれども、非常に一生懸命に仕事を重ねていた。それだけはよく分かりました。

業者に対しては強い態度をとっていたかもしれませんが、自宅に帰って私に弱音を吐くことが時々ありました。「今日は怒鳴られたよ」「怖い思いを

した」。家族だったから話したのかもしれませんが。そんなことも考えてみますと、夫がいなくなった原因、やはり夫自身に失踪するような心当たりはまったくありませんでしたので、仕事の上で、事件に巻き込まれたのではないか。私はずっとそう感じていました。

市役所の対応はといいますと、「トラブルはなかった。心当たりはない」。警察に対しても非協力的な態度をずっと続けていたようです。おまけに、かん口令が出たかのように、誰も話をしてくれる職員がいなくなってしまったそうです。逆に、誰も話をしてくれないということで、捜査員の皆さんは、これはもしかしたら何かあるのではないかと感じ取ってはいたようです。捜査員の方々がイライラしている様子が手に取るように分かりました。

一方で、市役所と業者の癒着問題があったので、警察はひそかに汚職捜査も行っていたようです。それを市役所は察して、業者との癒着問題が表面化しないよう、市役所を

全力で守っている。そのように考え取れる行動が目立ちました。

事務連絡に訪ねてくる職員二人以外、私のところに訪ねてくださる方はまったくありませんでした。電話も一切いただけませんでした。だからこそ私自身も、これは何か変だと思うこともたくさんありました。やはり夫は市役所に見捨てられてしまったのではないかとついつい考えてしまい、孤独と孤立を味わったいちばん辛い時期でもありました。

事件以来、私達家族はどのようにして過ごしていたか。娘と息子は大学を卒業して、社会人として働いていました。普段は、私一人が家にいて、家の中は非常に静まり返っていますが、県道沿いに面した我が家は観光スポットのようでした。

家の中にいろいろな声が聞こえてくるんです。「ここよ、ここよ。ここが小佐々さんの家よ」。少しでも私の顔が見えたりすると、「あー、いたいた」。私と目が合うと、その

方はずっとどこかに走り去ってしまうのです。いつも「あ、いたいた」「あ、ここよ、ここよ」そんな声を家の中で聞きながら、その人たちが静かになってどこかへ行ってしまったのを、家の中でずっと耐えていました。

見世物のような状態が続いていたものですから、買い物にも出られませんでした。イヌを飼っていましたが、イヌの散歩さえもなかなかできませんでした。人に会うのが嫌で、怖い思いも重なり、なかなか外に出ることができず、結局 4 年間必要以外は家の中に引きこもる生活をし続けてしまいました。

でも、休みにになりますと話は別です。私たち家族は夫を探し続けていました。息子は休みの度に、日光の山々、足尾の山々、宇都宮市の郊外を流れる鬼怒川の河川敷を必死になって朝から晩まで探していました。私と娘と飼っていたイヌは東北自動車道ののり面をずっと探していました。夫が投げ捨てられているのではないかと思ったわけです。

そのほか、夫の職場の隣の

黒川の河川敷をずっと県境まで探し続けました。でも、残念ながら何の手掛かりもつかむことはできませんでした。

そんなことをして、私たち家族は疲労困憊だったのでないかと思えます。まず、私が倒れました。左手にまったく力が入らなくなって、10 円玉も持てませんでした。脳疾患でした。お医者さんに即入院と言われましたが、夫を探している最中だったので、入院することはできないと思い、「家に帰してください」と先生の前で泣きわめきました。「命の保証はないよ」先生にそうまで言われました。

その時、婦長さんがお見えになって、「小佐々さん、これはね、神さまがあなたに与えてくれた特別休暇よ。大切にしましょうね」。とおっしゃいました。それで入院する決心をしたのですが、病院はとても良い所でした。私にとって心身ともに安らぎをいただける場所でありました。

逆に、退院してまた元の生活に戻るのが非常に怖くなりました。娘も息子もうつ状態のような感じになっていきま

した。娘は顔半分が痙攣して、お医者さんに通い続けていました。精神的にも相当なダメージを受けて、気持ちの浮き沈みが多くなっていました。

息子も忙しく仕事をしていましたが、思う様に夕食が食べられませんでした。精神的なものです。朝も起きられないのです。私が起こしに行ってもやっと起きて、お茶かコーヒーを飲んで、また出勤していました。そんな状態できちんとした仕事ができるとは私も思いませんでした。結局、仕事でミスをして、上司や同僚にもものすごく責められたそうです。被害者の置かれている心身の状態がどんなものかまったく理解していただけない会社でした。結局、息子はその仕事を失いました。

そんなことをして、1年3カ月たった時です。地元の警察署の署長さんがお見えになって、夫が殺害されている。加害者を逮捕したという知らせをいただきました。その知らせをいただいた平成15年2月6日という日が、夫が生きていればちょうど59歳の誕生

日でした。

私達家族にとって、こんな辛く悲しいことはなかったです。警察の皆さんにも、あまりに辛くて泣きわめいたこともありました。そこにまた輪をかけるように、夫の殺害を依頼した主犯の業者が行方をくらまし、自殺体で発見されたという知らせをいただきました。これもまた非常に辛いことです。何としてでも法廷に立たせたかった。それができない悔しさ。今でも、本当に悔しい思いだけが残っています。

主犯は地元の廃棄物運搬業者でしたが、夫を殺害した人間がいます。埼玉県の前暴力団関係者3名です。リーダー格は、前科14、15犯だっと思えます。覚醒剤とかその他のいろいろなことで、刑務所と社会を出たり入ったりの人生です。その両者を仲介する者が一人いました。主犯の業者の下請けをしていた埼玉県の人間です。

結局、主犯が死亡してしまいましたから、宇都宮地検からいただいた書類は、逮捕・監禁、営利略取、殺人、死体遺棄事件は被疑者死亡により

不起訴とするというものでした。こんなものは決していただきたくありませんでした。

どのように犯行が行われたか。何度か埼玉県から私の住んでいる鹿沼市まで下見に来て、準備も結構やっていたようです。夫の事務所の2階まで行って、タイムカードの確認をしていたことも分かりました。この場所に夫がきちんと勤務していることを調べたのかもしれない。夫の自転車を何度か付け狙っていたこともあるようです。我が家の確認にも来ていたそうです。私の車がどんな車か、どんな色か、家の表札がどんなものか、きちんと把握していたようです。

そして当日、職場から200mか300mしか離れていない道路上で拉致し、そのまま車に乗せて、埼玉県の実行犯の一人の事務所まで連れて行ったそうです。

そこで降ろされて、目隠しをされ、ガムテープで体をぐるぐる巻きにされ、今度は別の車に乗せられて、国道17号線を通って群馬県内の山中まで連れて行かれたそうです。

山の中を連れ回され、拉致されてから9時間くらいたった時、車から降ろされ座らされた。3人の実行犯の一人がひもを持っていて、そのひもを夫の首に二重に巻き、二人が同時に引っ張ったそうです。

刑事裁判の時に、実行犯の一人が「ひもを引っ張った時、小佐々さんの首がカクンと落ちた」。そんな言い方をしました。おそらく、それで命は駄目だったのではないかと思っています。

実行犯のリーダーが、拳銃を持っていて、とどめはその拳銃一発だそうです。しかも、暗闇の中、崖下に落とされたため、残念ながらまだ遺体は見つかっていません。車や拳銃などは処分されていました。

刑事裁判を維持できるのかどうか本当に不安でした。でも、おかげさまで何とか起訴でき、裁判は続けることができました。

暴力団の怖さですけれども、実行犯は500万円で殺害を請け負ったそうです。でも、とんでもない人間達ですから、いい金づるを見つけたのでしょうか。主犯の人間と

仲介した人間は何度も何度もお金をむしり取られ、結局、1500万以上のお金が3人の手に渡ったそうです。

仲介した人間は、裁判の時に、「逮捕されてホッとした」と言いました。もうこれ以上、金の工面をしないで済むから。本音だったのでしょう。

実行犯の一人は、受け取った分け前を奥さんに生活費として渡していたそうです。また、孫の小遣いにも渡したと言っています。人を殺めた、そういうお金ですよ。孫の小遣い。もしかして後でそのお孫さんが知ったら、どんな思いをするのか。少し心配になりました。あとは、ギャンブルでなくなったそうです。

結局、加害者が5人いましたけれども、主犯が亡くなっていますので、そのほかの人間の刑は無期懲役、懲役18年、17年、14年で確定いたしました。

皆さんから地元の皆さまに伝えていただきたいことは、刑事裁判の判決文の中で、夫は「孤立無援の中で孤軍奮闘して仕事をしていた公務員の

鑑です」と言われましたが、こんな不当要求をするような業者を一人で任されてしまった、こんなことが二度と繰り返されてはいけないということです。

どう対応するか。それは皆さま方のほうが専門家ですからご存じでしょう。一度、歪められた行政を元に戻そうとすると、とんでもない犠牲が生じるわけです。

ある職員は、刑事裁判の中で、「大声で怒鳴り飛ばしていたが、まさかこんなことになるとは」と、証言しています。夫も、もしかしたら少し危機感がなかったのかもしれない。二度とこんなことが起きてはいけません。

どうぞ、地元にお帰りになって、この事をきちんと皆さまにお伝えいただければと思います。

夫の事件では5人が亡くなっています。夫が亡くなりました。主犯の業者が自殺しています。実行犯、殺害を実行した二人が刑務所内で病気で亡くなっています。一人は収監されてすぐ亡くなりました。もう一人は、昨年12月、やは

り刑務所内で病気で亡くなっています。それに夫の前任者、業者と飲食を共にしていたという職員ですが、夫が殺害されて逮捕者が出たと発表になったその5日後に、市役所の5階の屋上から飛び降り自殺をしています。

早い段階から市役所が捜査に協力してくださっていれば救えた命もあったはずです。どんな命でも決して無駄にすることがあってはいけないと思います。重要な人物が次々と亡くなってしまったわけですから、事件の全容解明も程遠いものになってしまいましたし、夫の遺棄場所は今でも特定できていません。こんな状態で、私達家族は今も苦しんでいるわけです。

ところが、また同じようなことが起こりました。平成19年に明るみになったことです。

市の公共事業の入札がありました。落札したのが市の商工会議所の会頭が社長をしている会社で、そこに暴力団組長の会社が下請けに入れずトラブルになっていたそうです。市役所の建設部にもクレーム

を付けていたそうです。当時、栃木県では、まだ暴力団の排除条例がありませんでした。

そこで、当時の市長、市議会議員、元県議会議員、当の商工会議所会頭、そうそうたるメンバーがクレーマーの組長と密会をしたそうです。その密会の場所は当時の国会議員の事務所でした。

そこで市長は、不手際があったと言って、組長に謝罪をしたそうです。そして、何かあったら直接私に電話してくださいと、組長に携帯電話の番号を教えました。当時の副市長もこの密会を知っていましたが、止めることはなかったそうです。

このことが明るみになっての市長の弁解は、「二度と小佐々のようなことが起きないように、私が出向いて丸く収めた。なぜ悪い？」そんなニュアンスの言い方だったそうです。夫の犠牲は一体なんだったのでしょうか。まったく学習していない。本当に愕然としました。悔しかったです。

でも、市民の皆さんはきちんと判断してくださいました。この市長は、その数カ月後に

あった市長選に敗れています。

市民の皆さんがおっしゃいます。「やはりね、小佐々さんのことはきつかったからね。同じようなことが起きても、きちんと処理できないんだもの。仕方がないよね」。そういう方がたくさん投票したのかもしれない。

私自身にも、また悔しいことが起きてしまいました。夫が勤めていた環境対策部、その環境クリーンセンターで、わずか1カ月ちょっと前、職員の一人が逮捕されました。入札価格を業者に教えていたそうです。逮捕されて、業者側も職員もどちらも容疑は認めたとありますが、結局不起訴になってしまいました。

この報道を見た時、非常にショックでした。夫の事件のきっかけは市の職員と業者とのほんのわずかななれ合い体質。食事を共にするようなちょっとした親しい関係が続けたからこそ、どんどん癒着という状態につながって行って、業者側に便宜を与えるようなことになったわけです。業者側と職員の間には大きな癒着の状態が長年続いていたことが

原因でして、それを何とかしようと思って、元に戻そうと思った夫が犠牲になってしまったのに、また同じようなことが起きてしまった。

最初はほんのわずかな1ミリの穴だとしても、業者はつけ上がるかもしれません。また同じような体質が続いてしまう前に、逮捕されてよかったと思っていますけれども、職員の皆さんもこのことに関しては非常にショックだったと思います。皆さん愕然としたと聞いております。こんなことが続いているような自治体では、残念ながらどうしようもないのではないかと私はそう思っています。

このことも考慮して、自治体の職員の皆さま方にも研修を何度も何度も重ねていただきたいと思います。絵に描いた餅には決してしてほしくないと思います。魂を入れて、本腰で仕事に専念していただければと思っていますので、皆さま方もどうぞお力添えをお願いします。

安全な、そして安心な社会のためによろしく願います。安全で安心な住みよい社

会。私たち一人一人、誰もが考えなければいけない問題であると思いますが、やはり、一般の人たちは暴力団絡みになりますと、非常に怖いと感じることがあると思います。だからこそ、専門家である皆さま方の力が必要です。

市民の皆さんと専門家の皆さま方が一緒になって反社会的勢力は絶対要らない。この声を上げ続けていかないと、安心して私たちが暮らせる社会にはならないと思います。このことをぜひ考えていただいて、皆さま方にはこれからもご尽力いただきたいと思えます。

最後に、犯罪被害者として私が考えておりますことを、少しだけお話しさせていただきます。

夫が事件に遭った時は57歳でした。犯人が逮捕されたと聞いた時に生きていれば、59歳になっておりましたから、定年が本当に間近でした。それまで夫は仕事も一生懸命やっておりましたけれども、地域でのいろいろなことも一生懸命やっておりました。

運動も大好きな人でしたから、スキー部に入ってスキーもやっておりました。サイクリングもしておりました。また、若い時バレーボールをやっていたものですから、地元の小学校のスポーツ少年団のバレーボール部の監督を長年ずっと続けておりました。そんなことですから家にいる時間は短く、土日などは、バレーボールのお子さん達の練習試合や大会とかで家を空けることが非常に多かったです。

でも、当時57歳という年齢だったので、定年後は私と一緒にいろいろやりたい、「ああしような、こうしような」と、よく食事の時に口にしていました。でも、家を留守にすることが多かったですから、「当てにしないで待ってるわよ」。それがいつもの私の答えでした。

本当に当てにすることができなくなってしまったわけです。もっともっと生きたかったと思います。実際、生きられたわけです。

私たち家族は犯罪被害者と呼ばれる立場になってしまいました。被害者遺族とも言わ

れたりもします。でもこの犯罪被害者という言葉は欲しくはありませんでした。一生背負って生きていかなければなりません。事件以降、あまりにも大変なことをたくさん経験してきました。本当に辛いことばかりの連続です。夫だってもっともっと生きてきたかったです。

このことを考えていただきますと、被害に遭った人たちが皆さまの周りにもいらっしゃるかもしれません。そういう方々を決して孤立させてはいけないと思います。もし孤立させるようなことがありましたら、なかなか被害回復にはつながりませんし、人間不信が増幅して、家族がばらばらになるような事になるわけです。

だからこそ、もし皆さま方の周りに犯罪被害者がいらっしゃる時は、温かい眼差しをもって、ほんの一言でいいのです、声を掛けてください。ご自分が一人でないということが分かった被害者は、少しずつ力を出して生きていこうという気持ちになっていきます。ぜひ、お願いしたいと思

います。

もう一つお願いしたい事は、誰にでもできる被害者支援です。それは、私たち一人一人が加害者にならないことです。そうすれば、被害者と呼ばれる人たちを減らすことができます。被害者が一人減り、二人減りという状況になっていくのではないのでしょうか。犯罪被害者として、一生、理不尽な思いをして生きていかなければならない方々を増やしてはいけないと思います。

間もなく 12 月を迎えます。夫は群馬県内の山中で眠っています。残念ながら場所の特定ができていませんので、どこに眠っているかは分かりません。年に 4、5 回、私は夫に会いに群馬県山中を 2 時間くらい歩くことがあります。でも私には靈感がないものですから、山中を歩いていてもまだ助け出してあげることができません。非常に辛いです。

寒くなりますと、私は温かい布団の中で湯たんぽを入れて寝ています。しかし夫は、栃木県よりもちょっと雪深い、群馬県の山中の冷たいところ

に眠っていますから、私はいつも謝りながら眠っています。それがずっと続いています。

理不尽に命を奪われること、人の手によって人生の幕引きをされてしまうこと、こんな辛いことはありません。だからこそ、私たち家族のような悲しい思いをする人たちをこれ以上増やしたくないと思っています。どうぞ、皆さま方もぜひこのことを忘れないでいただきたいと思います。

もう14年過ぎてしまいましたけれども、私は夫をわが家に連れて帰ることを諦めるつもりはありません。何と少しでも、わが家に連れ帰りたい。この手に抱きしめてやりたい。31年間連れ添った、私にできる最後の役目かと思っています。

皆さま方も、どうぞ一日も早くわが家に帰れることを願っていただければ幸いです。

本日はまとまりのない話をさせていただきました。ご清聴たいへんありがとうございます。このへんで失礼させていただきます。ありがとうございます。